追悼式に向けて

今日の日にあたって、私たちは現在の自分たちの気持ちに忠実に行動しようと話し合いました。「１年という区切りに、息子が立った同じ場所に立ち、何を感じるのか確かめたい」という思いから追悼式に参加する遺族。「雪崩の起きたこの場所に足を向けることができなかった」遺族。私たちは、それぞれの思いで息子と向かい合い、粛々と１日を過ごすつもりです。

追悼式開催については、遺族に何の相談もなく決められており、詳細については新聞で知りました。一周忌と日程がぶつかっている遺族もいます。しばしば、私たちは新聞報道などから県の取り組みや意向を知ることがあります。なぜ、まず遺族に連絡するという大切なプロセスを省いてしまうのでしょうか。子どもが雪崩に巻き込まれたという第一報も、私たちは報道から知りました。

平成２９年３月２８日の学校説明会の翌日、私たちは、平成２２年３月２７日の春山安全登山研修会で、生徒・教員が雪崩に巻き込まれていたことを当時講習会に参加していた生徒の保護者から知りました。学校説明会で説明してくださった先生方は、平成２２年の専門委員長で、講師としても参加していたのですから、当時の雪崩事故のことを忘れるはずがありません。しかし、私たちにこの事故の事実を伏せ、私たちからの調査の要望があるまでこの事故についての調査は行われませんでした。

平成２９年６月３０日に発表された検証委員会による中間報告書では、私たちが把握している事実と一部大きく違った記載があったため、再調査の要望を口頭でしましたが県教委は調査を行わず、再度、文書で要望をしました。

平成２９年１０月に最終報告が提出されて提言がなされてから半年近く経ちますが、具体的な再発防止策はどのように進んでいるのでしょうか。これらのことは、県教委や高体連の対応のほんの一部にすぎません。当たり前のことを当たり前にしてくださらない県教委の対応に、ますます不信感が募るばかりです。

最後に、１年前のあの日、厳しい状況の中で救助に携わってくださった多くの皆様方の心ある行動に心より感謝申し上げます。失ってしまった息子への思いと、あの日から必死で生きてきた今日までの思いは遺族一同、共にあります。

平成３０年３月２７日

遺族一同

平成３０年３月２７日

遺族一同